

註

いずれの場合においても真淵は本質と機能とを必ずしも明確にではないがやはり分離して理解していた。真淵のような意味で文学的本質とその社会的機能とを分離して思考する態度が成立したことは歌論史の展開のなかでは一の近世的特質をもつといいうる。そのことは徂徠における政治と文学との関係を考慮するとき決定的に証明できる筈である。

(六〇・四)

狹衣物語冒頭の一節について

土 岐 武 治

一
狹衣物語に於ける冒頭本文の出典を考察する必要から、まづその該当本文を登載すると次の通りである。

少年の春はをしめどもとゞまらぬ物なりければ、やよひの廿日あまりにもなりぬ。御前の木たちなにとなくあをみわたたりて木ぐらきなかに、中嶋の藤は松にとのみおもはずさきかゝりて、山ほとゝぎすまちはなるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりにことならずみわたさるゝ夕ばへのをかしさを、ひとりみ給ふもあかねば、さぶらひわらはのをかしげなるして、一枝をらせ給ひて、源氏の宮の御かたにもてまいりたまへば、御まへには中納言・中

- ① 牟佐佐嶺波、木末求跡、足日木乃、山乃佐都雄爾、相爾来鴨
② 「日本歌学史」二六五頁による
③ 「近世歌論における瀟浪詩話の投影」(「橋本博士古稀記念東洋学論叢」立命館文学第百八十号)

將などやうの人々さぶらはせ給ひて、宮は御手ならひ、多などかきすさびてそひふさせ給へるに、「この花の夕ばへこそつねよりもをかしく侍れ。春宮のさかりにはかならずみせよとのたまはする物を」とて、うちおき給うを、(狹衣物語 卷一上承応刊本)
右の用例文の冒頭「少年の春はをしめども」の本文の出典については、既に下紐(第二)、狹衣文段抄(二)、狹衣物語抄(乾一)などの旧註に伝へる通り、和漢朗詠集の春の部に、「春花」と題して収載する白居易(新唐書云、居易卒於会昌六年、年七十五。旧唐書則謂卒於大中元年、年七十六。両書小岐。)の作「背^{ケテ}燭^ヲ共^ニ憐^ミ深夜^ノ月^ヲ」。踏^{フミ}花^ヲ同^ニ惜^ム少年^ノ春^ヲ。」に拠つたものである。元

来、狭衣物語全巻の本文中に見える引用句には、他の諸作品からの和歌は頗る多いが、これに次いで仏典・漢詩などの引用個所もまた相当に多いのである。いま行文中、試みに和漢朗詠集よりの漢詩引用の部分を左に例記して見ることにする。

(1) 少年の春はをしめどもとどまらぬものなりければ (巻一上)

(出典) 前記参照

(2) 蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なりとしのびやかにうち誦し給ふ御声

(巻一下)

(出典) 鳥下ニ緑蕪一秦苑静。蟬鳴ニ黄葉ニ漢宮秋。 (巻上夏)

(3) またこれ涼風慕雨の天と口ずさみ給へるなどを (巻一上)

(出典) 不_レ堪紅葉青苔地。又是涼風慕雨天 (巻上秋紅葉)

(4) 宮漏正に長し、空階に雨したると、しのびやかに誦し給へる

御声 (巻上秋)

(5) たがたまづさをひとりごちて、せいたいの紙の色紙と誦し給へる御声など (巻三中)

(出典) 碧玉箏粧斜立柱。青苔色紙行書。 (巻上秋)

(6) 燕子楼の中と、ひとりごたれ給ひつゝ、丑四つと申すまでにな

りにけり。 (巻四下)

(出典) 燕子楼ノ中ノ霜月ノ夜。秋来ツテ只為ニ一人ノ長シ。

(巻上秋)

以上の中(1)(2)(3)(6)は白居易(七七二—八四六新唐書説)の詩であつて、(1)の「背_レ燭共憐_二深夜月_一……」は、白香山詩集(白氏長慶詩集にも收載)の巻十三の部に收載の一詩で、即ち

春中興ニ盧四周諒ニ華陽觀同居

性情嬾慢好相親 門巷肅條稱_レ作_レ鄰

背_レ燭共憐深夜月 踴_レ花同惜少年春

杏壇住僻雖_レ宜_レ病 芸閣官微不_レ救_レ貧

文行如_レ君尚憔悴 不_レ知霄漢待_二何人_一

とある。「踴_レ花同惜少年春」とは、作者が花に歩して盧周諒と共に少年の春を惜んだりしているとの意味である。

無窮会図書館に清水浜臣(一七七六—一八二四)自筆書入、承応三年刊の板本が所蔵されている。この本の「巻第一之上」の本文冒頭の上欄外に浜臣の朱筆による書込みが次の通り伝へる。

古本三丁目表此ごろ堀川のおとぎといへるを発端の詞とし、十丁目御いそぎなめりといふ詞の下へ少年の云々の詞つゞけたり、普通の本あやまれるに似たり、

また、この古本の性格についても、浜臣は上記の本の最初にある「狭衣目錄並年序」上の欄外に、

浜臣云、古本筆者 卷一、二條院讀岐。卷二 越部禪尼、首一葉為家卿写。 卷三 為家卿。 卷四 後土御門勾当内侍。此古本

松平周防守の家にあり。

と朱書してある。浜臣が云ふ右の古本は、現在散佚してをり、そこでこの本の性格を推定する処置として、浜臣が古本を用ゐて該本に対校する全巻の校合異文を精査検討することにした。その結果、古本の本文系統を推測するに、現存諸本中、勸修寺殿教秀卿本・古活字本などの諸本に最も近似してゐることがわかる。浜臣の筆によると、古本では「このごろ堀川のおとぎ……」から七枚目の「おぼろげならずおぼしをきつる御いそぎなめり (浜臣は承応刊本当該個所で

「御ありさまなるへし」と右側に古本文校合」とあるが、古本に近似する上記の伝本は勿論、無名草子（一一九六—一二〇二間に成立）にも、「少年の春はとうちはじめたるより云々」との如く、狭衣物語の冒頭文は現存諸本に悉く「少年の春云々」と見えるのである。

浜臣が用ゐたといふ右の古本に関して、入江相政氏は、岩波講座日本文学収載「狭衣物語」で、「現存の幾多の異本の中に、何等かの形に於て、それが現れている筈だと思ふが、さういふことは無いのであるから、今までの調査の結果では、かういふ形を持つた本の存在は信じない方が安全であらう」と説明し、また篠崎五三六氏は、国語国文第三卷第四号収載「狭衣物語の基礎的研究」で、「浜臣書入本以上に流布本に類似の形を有する燭原本、或は是等と同一の原本より幾つかに別れたと思はれる近衛一本五冊本以下の諸異本は何れも流布本の冒頭と同一であるから推して、浜臣書入本は特殊な変形をした物と見るべきであらう」と推断してゐる。按ずるにやはり古本に伝へる上記の変形は、本の紙の綴り誤りによる乱丁から、このやうな錯簡が生じたものであらう。栄花物語卷一「月宴」の冒頭文に「世はしまりて後……多くの女御達侍ひければ男御子十六人・女御子数多おはしけり」とあり、その次に「その頃の太政大臣基経のおとどと聞えけるは云々」と藤原基経の経歴に入つてゐる。狭衣物語冒頭もこのやうな歴史物語風の構成で、先づ「少年の春は……おほしたて給ふまじきわざなりけれ」と物語の序を述べ、次に「この頃、堀川の大臣と聞えて云々」と狭衣中將の父の身上に及ぶといふ、これら同種の構成傾向も、右の事実を意味づける一傍証と

ならう。従つて狭衣物語の冒頭本文の原型は、前に述べた白居易の詩を出典とする「少年の春は云々」を本物語の冒頭文と容認して然るべきと考へたい。

二

平安朝物語作品の冒頭について、私は「平安朝文学研究」、昭和二十四年十二月、第二輯所載、拙稿「昔物語考」思はぬ方にとまりする少將」、並びに拙著「堤中納言物語新釈」収載「思はぬ方にとまりする少將」篇の「文評」欄中で解説してあるので、本論ではその重複を避けて、この問題に関する詳細な解説は上記の卑稿を参照して頂くことにして、本論ではそれを割愛することにする。たゞ当時の物語冒頭文には「昔……（宇津保）」・「今は昔……（竹取・大和）」・「昔男ありけり（伊勢）」・「いづれの御時にや……（源氏）」・「いつの頃……（とりかへばや）」・「今昔……（今昔・古本説話集）」といった体裁で筆を起してゐるのに、狭衣物語では、上述通り「少年の春はをしめども……」といふ冒頭文になつてゐる。この書出しの筆法について、無名草子では、

少年の春はとうちはじめたるより、ことばづかひ何となくえんにいみじく、上ずめかしくなどあれど、さしてそのふしと取り立てて心にしむばかりのところなどはいと見えす。

と文評し、また堀部正二氏著「中古日本文学の研究」収載「狭衣考証」中には、

無名草子の作者はこの「玉藻にあそぶ物語」についてさしてあはれなることもいみじきこともなければども「親はありくときいなめど」とうち始めた程、何となくいみじげにて云々と述べて、そ

の慣例を破つた冒頭の手際の見事さを賞してゐるのであるが、かくの如き新しき技法は、狭衣の「少年の春は」とうち始めた手法とも共通した特質のものといふべく、当時の物語群の中に於いては、極めて類の乏しきものであつた（以上は宣言を作者と推断する上での論述）

と評述してゐるのである。平安朝貴族人の人事または自然現象に對する統一的感情生活を種々吟味するに、それは過去への憧憬と追憶を体観する情緒にあると思ふ。その対象が歴史的な過去であらうとも、空間的な懸隔のあるものへのそれであつても、回顧し思慕する幻影の詠嘆を最も愛好した宮廷生活であつたのである。従つて、今のものよりも昔のものへ、近いものよりも遠いものに、右のやうな觀照の主体が醸出されるわけである。平安朝に於ける上載作品の冒頭文にも、右の統一的感情の内容を確認することが出来るのである。殊にこの種の冒頭慣用句の結びは、助動詞「けり」になつてゐる。例えば

今は昔竹取の翁といふものありけり。 （竹取） 昔男ありけり。 （伊勢） 今は昔二人して女一人をよびけり。 （大和）

昔式部大輔右大弁かけて清の王ありけり。 （宇津保） いづれの御時にや女御更衣あまたさぶらひ給ひける。 （源氏） 今昔親迦如来未だ仏に不成給ひける。 （今昔）

との如く、「けり」の意即ち「……があつたとさ」と云ふ過去回想・詠嘆の意味の助動詞が、この場合「昔……けり」となつてゐる文面の形式に、上述の生活態度が如実に表現されてゐる。また我が國の民族、わけても宮廷中心の貴族人は、四季をり／＼の季節に對

てし、いかに鋭敏であつたかは、今更云ふまでもないし、殊に古今集や、その他の歌集を一見しても、或は當時の物語を一読しても、文中至るところに季節と人事が最も調和し融合してゐる情趣生活に、しばし陶然とするのである。しかも人事は勿論、移り変わる季節に對する情緒の主体化は、去るものと訪れるものとへの調和的心情である。

狭衣物語の冒頭文「少年の春はをしめどもとまらぬものにしなければやよひ廿日あまりにもなりぬ」とある文脈を分析すれば、それは、「少年の春はをしめどもとまらぬものにしなければ」と「やよひ廿日あまりにもなりぬ」との上下二句から成立してゐるのである。上句は「わか／＼しい春の日は青春の齡の如く惜まれながらも空しく過ぎ去つて」といふ往々春を痛みながら、下句の「とう／＼三月も二十日余りになつてしまつた」といふ、静觀な心情で初夏を迎へようとする手法の中にも、上述同様な生活の情緒を察知することが出来るのである。この場合忘れてならぬことは、下句「……なりぬ」の「ぬ」の用法である。この「ぬ」は助動詞「つ」と共に完了の意味を示すのであるが、しかし「つ」は動作の完了を表すのに對して、「ぬ」の方は更に状態の發生を表すもので、その結果の存続状態の發生を期するものとなる。文法諸家はよく「つ」は動作的であり、「ぬ」は状態的であるといふものも、このわけである。下句の「ぬ」によつて「三月も二十日余りになつてしまつた」といふ結果から「御前の木立なにとなく青みわたたりて木暗きなかに……」との發生を伴はせてゐるのである。この冒頭文の内面に潜む、即ち去るものを惜みつゝ訪れるものを穩しく迎へる余情的な心情を、もつとも確實に意味づけてゐることば、は此の「ぬ」であらう。

日本文学大系卷五收載「狭衣物語」の解題篇で、尾上八郎博士は、

最初の「少年の春」の書出しは、極めて突如として、旧套を破つて読者を驚して居る云々

と述べてあるが、「少年の春は（深川本「春」）をしめども」の着想をよく玩味すれば、作者は当時流行の朗詠を「からうた」の体裁で配し、その次に「とゞまらぬものにしあればやよひ廿日もすぎぬ」と和文調でつゞけ、それが恰も和漢朗詠集の二句一章のそのの如く、「勁さ」と「圓さ」の対句に、更に朗詠の詩韻のひゞきを装はせた形態になつてゐる。しかもこの文章に内包する心情の理念は、作者の奇想からではなく、これは前述する通り、当時の人々の最も愛好した統一的心情であつて、作者はそれを筆に再現したものであり、源氏物語若菜（上）の本文中にも「春惜みがてら、月の内に小弓持たせて参り給へ」と「春惜み」の語がある。和泉式部物語の冒頭に

夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ、明し暮すほどに、はかなくて四月十日あまりにもなりぬれば、木の下くらがりもていく云々と見えるし、また堤中納言物語の一篇である「あふさか越えぬ権中納言」の冒頭文も、

五月まちつけたるはなたちばなの香も、昔の人こひしう、秋の夕べにおとらぬかぜにうちにはひたるは、おかしうもあはれにも思ひしらるゝを、やまほとゝぎすも里なれてかたらふに……

と伝へるが、これらの物語の手法も、狭衣物語のそれと全く同種なもので、ともに王朝人の嗜好に迎へられる物語の序曲である。しか

も作者は前述の効果を一層高める手段として、慣例の表現技巧に倣つて「少年の春はをしめども云々」には上記の白居易の詩を、「やよひ廿日あまりにもなりぬ云々」には、後段に解説する源氏物語「胡蝶」の巻の冒頭文を引用したものと思ふのである。

三

狭衣物語の冒頭文中、左記の本文の著述材料について種々考察し得ることにする。

A やよひ廿日あまりにもなりぬ。 B 御前の木だちなにとなくあをみわたりて木ぐらきなかに、 C 中嶋の藤は松にとのみおもはずさきかゝりて、 山ほとゝぎすまちははなるに、 池の汀の八重山吹は井手のわたりにことならずみわたさる云々

右に例載する引用本文は、源氏物語「胡蝶」の巻の冒頭文を典に用ゐたものと推測するが、いまこの典拠論証の必要から胡蝶の巻の該当本文を登載すると次のやうになる。

A やよひのはつかあまりのころほひ、 B 春の御前のありさまつねよりことにつくしてはふ花の色、とりのごゑ、ほかのさとははまだふりぬにやと、めづらしうみえきこゆ。 山のこたち、 C なかじまのわたり、いろまさるこけのけしきなど、わかき人ゝのはつかに心もとなくおもふべかめるに云々

とある通り、紫上の御殿の庭前を描くこの文章の情景は、上例の狭衣冒頭文「やよひ廿日あまり云々」の趣向と全く似通ふのである。

しかもその上、これら両物語文中の傍線本文を対照しても、AとA'、BとB'、CとC'と云ふ具合に、両者の本文までが殆ど符合して

あるのである。たゞこの際参考までに特記して置きたいことは、右の狭衣の用例本文中「中嶋の藤は松にとのみ思はず咲きかゝりて」と見える本文の引用歌に關し、旧註では「夏にこそ咲きかゝりければ花松にとのみも思ひける哉 定家の歌」と伝へてゐる。がこれは本文の意味から、また狭衣物語の成立年代から推定しても、定家の歌の引用によるものとは誤りで、次に掲載する源信之の歌が引用されたものである。

夏にこそ咲きかゝりければ藤の花松にとのみもおもひけるかな（拾遺集 卷二 夏）

擬て、この狭衣物語冒頭文の典拠は、前述の通り、内外両面の徵証によつて、源氏物語胡蝶の巻からの著述材料によるものであることを、更に次の諸理由の傍証を挙示することによつて、前の証明を確認することにする。

その第一は、前記の狭衣用例文の末尾に、池の汀の八重山吹は、井手のわたりにことならずみわたさるゝ夕映のをかしさを、と云ふ一文がある。この本文の典拠について、「下紐 一」では、次のやうに説明してある。

ゐてのわたり 引春の池やゐでの川せにかよふらん岸の山吹をこそ
もにはへり 源氏胡蝶巻の傍也

と伝へるが、源氏物語「胡蝶」の巻で、三月下旬頃、六條院で光源氏は親王上達部達を招待して、終夜歌舞の宴を張つた時に、それぞれの女房達が詠じた歌に、

- (1) 風ふけば浪の花さへいろ見えてこや名にたてる山ぶきのさき
- (2) 春の池や井手のかはせにかよふらむ岸の山吹をこそにはへり

(3) 亀の上の山もたづねし船のうちに老いせぬ名をばこゝに残さむ
(4) 春の日のうらゝにさして行く船はさをのしづくも花ぞちりけり
などが見え、このうち(2)の歌を右の狭衣の本文が引用したものである。

その第二は、狭衣物語卷一上の後半に、狭衣中将が、源氏宮を訪れて、美しい宮の容貌に見とれる場面がある。即ち

ひるつかた源氏の宮の御方にまゐり給へれば……………この御文に紛らはし給へる用意、気色、まみなどいひつくすべうもあらずめでたうみえ給ふに。（狭衣）涙さへ落ちぬべうおぼえ給ふまぎらはしに、この絵どもを見給へば、在五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけり。と見るに、あいなうひとつ心なるこゝちして、（狭衣物語 卷一上）

と伝へるが、これは源氏物語、胡蝶の巻の後半で、源氏は養女玉璽の処に忍び、恋情を説きながらその姿に見とれる場面に近似するのである。

いものしめやかなる夕つ方……………まづこの姫君の御さまの匂ひやかげさを思ひ出でられ給ひて、例のしのびやかに渡り給へり。手習などしてうちとけ給へりけるを、起きあがり給ひて、恥らひ給へる顔の色あひいとをかし（源氏物語 胡蝶）と描く趣向を前の狭衣のそれに照合する時、著作上、狭衣への交渉は無関係であつたとは思はれない。

その第三は、胡蝶の巻で、光源氏が玉璽の様態を眺めて、うつぶし給へるさまいみじうなつかしう、手つきのつづ／＼とてえ給へる、身なり、はだつきのこまやかに美しげなるにも、なか

なかなる物思ひそふ心地し給ひて、けふぞ思ふこと少しきこえ知らせ給ひける。(源氏物語 胡蝶)

と恋慕の情を湧かすあたりは、狭衣物語の、

かれなき御ひとへは、みぐしのひま／＼より見えたる御腰つき、かひななどのうつくしさは、人にも似給はねば、あまり思ひしみにけむ我が目からにや、とまもられて、例の胸はつづ／＼となりさわげど、よくしのび返して、つれなくもてなし給へり。(狭衣物語 卷一上)

とあり、狭衣中將が源氏宮を眺めて、見惚れるあたりに近似する趣向である。殊に胡蝶の巻では、光源氏が玉鬘へ「ふと昔思し出でるゝにもしのびがたくて」「見そめたてまつりしは、いとかうしも覚え給はずと思ひしを」と、つまり「昔の夕顔の姿が思ひ出されて」「逢つた最初はこれほど母君に似て居られるとも思ひませんでした」「逢つた最初はこれほど母君に似て居られるとも思ひませんでした」と云つて玉鬘に近づくあたりは、丁度狭衣物語では、狭衣中將が、源氏宮の書く在五中將の日記を眺め、「あいなうひとつ心なるこゝちして、目とよまる所々多かるに、えしのび給はで」と、つまり「自分は業平の心が一つ心のやうに思はれる、それほどあなたにたゞまらなくなつてくる。」と云つて、狭衣中將が源氏宮にさし寄る構想上の叙述面とも全く似通ふのである。

しかし宮田和一郎氏は、国語国文第十卷第四号收載「構想の上から見た源氏と狭衣」の中で「在五中將日記絵巻が源氏宮の前にあるのを見て、狭衣はそれによせてわが恋を訴へた事は、総角巻に、匂宮が御妹の一品宮に在五が物語の絵巻を示して意中をほのめかされたのに似てゐる」と述べてゐる。或は語句の近似する点から推し

て、前述する狭衣と源氏宮との構想は、胡蝶巻のそれに総角巻のこれを素材として取り入れたものかも知れない。

その第四は、胡蝶の巻で光源氏が玉鬘の腕をとらへる文章の前後を吟味すると、

橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおほえぬるかな
世ともの心にかけて忘れがたきに、なぐさむことなくて過ぎつる年頃を、かくてみたてまつるは夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそしのぶまじけれ。おほしうとむなよとて、御手をとらへ給へれば、女(玉鬘)かやうにもならひ給はざりつるを、いとうたておほゆれど、おほどかなるさまにてもしのし給ふ。(源氏物語 胡蝶)

と見える。これは光源氏と玉鬘とが向き合ふ傍のお盆の中にある橘を、光源氏は指して、これを懐しい昔の夕顔に擬へると、あなた(玉鬘)は別人とも思はれず、まるで夕顔本人のやうな気がすると云つて、玉鬘の手を捉へる場面である。ところで狭衣物語では、よしさらば昔の跡をたつね見よわれのみまよふ恋の道かはともいひやらず、涙のほろ／＼とこぼるゝをだに、(源氏宮)あやしと思すに、御手をさへとらへて、袖のしがらみせきやらぬ気色なるに、宮いとあきましようおそろしうなり給ひて、やがてとらへ給へる御かひなに、うつぶし給ひぬるけしきの、いひ知らぬものにとらへられたらむやうに思したるも、いとど心さわぎして、こゝら思ひつむる心のうちを、かたはしだにも打ち出づべうもなく、涙にのみおほれ給へり。(狭衣物語 卷一上)

とある。これは狭衣中將は源氏宮の書く在五中將日記を指して、

「私の氣持を疑ふのでしたら、あなた（源氏宮）の御覧になる在原業平を見て下さい」と云つて、源氏宮の手を捉へる場面であつて、これも上述の源氏物語のそれと全く同工異曲の趣向となつてゐる。

その第五は、前述する胡蝶の巻の歌舞宴の本文中に、こがねの瓶に山吹をおなじき花の房もいかめしう、世になき匂ひをつくさせ給へり（源氏物語 胡蝶）

とあつて、侍童が山吹の枝を持つて舞ふあたりは、狭衣物語の巻一の初めに

侍童のをかしげなるして、山吹一枝折らせ給ひて、源氏の宮の御方に持てまゐり給へれば、（狭衣物語 巻一）

とある、この場合両者は、ともに侍童が山吹の枝を持つと云ふ体裁になつてゐることも、狭衣物語の創作上、胡蝶の巻のそれと何かの縁念があつたものでなからうか。

その第六は、元来玉鬘は、源氏物語、帯木の巻に於ける雨夜の品定めに見える通り、頭中將と夕顔との間に生れた女であるが、光源氏は今では自分の処に引き取つて養ひ、表面上親子同然な生活でありながら、夕顔の形見として玉鬘へ心が傾くのであるが、一方狭衣物語における狭衣中將の母即ち斎宮は、源氏宮の父（先帝）と兄妹關係になつてゐる。従つて狭衣中將と源氏宮とは、血縁上従兄妹の間がらとなる。ところが、狭衣の父堀川大臣は、先帝の皇女である源氏宮を引き取つてゐるので、表面では狭衣中將と源氏宮とは、恰も兄妹同様な生活でありながら、狭衣は源氏宮をひそかに恋ひ慕ふやうになる。両作品におけるこのやうな類似する懸想の關係も、創作上源氏物語のそれが、狭衣物語のこれへ影響したものでなからう

か。たゞ胡蝶の巻中には、他に柏木は玉鬘を本當の妹であるとも知らずに想ひをかける一文もあるし、従つてこの場合に於ける柏木と玉鬘の兄妹關係が、右に記載する狭衣と源氏宮とが兄妹でありながら狭衣は恋慕するといふ著述材料に取り上げられたやうに、一見推測されがちである。しかし構想上、表現上、狭衣物語の発端は、前段にも詳述する通りに、胡蝶の巻に於ける光源氏と玉鬘との諸種の場面を数多く典拠としてゐる事柄から帰納し、その観点に立つて、この問題を推断すれば、やはり前記の光源氏と玉鬘のそれが、直接影響したものと認容したのである。しかも狭衣の作者は、胡蝶の巻の此の親子關係をば、下段に示すやうな兄妹の關係に、その素材を交代させたものであらう。堤中納言物語の一篇である「はいずみ」篇の後半に、懸想男の突然の訪問に慌てて灰墨を白粉と間違つて顔に塗るといふ女の意外な出来ごとの場面がある。これは平仲が硯の墨水を誤つて顔に塗る「泣きまね譚」を典拠として作られた物語であつて、しかも此の場合、男性である平仲の滑稽譚を「はいずみ」篇では女性のそれに換骨奪胎させてゐるのであるが、右と同様に狭衣物語の作者も、胡蝶の巻に於ける光源氏と玉鬘との表面上の親子關係をば、狭衣中將と源氏宮との表面上の兄妹關係に換骨奪胎させたものと考へたい。

以上論述する通り、表現上の語句や構成的手法の近似すること及び引歌などの諸理由から、用例に記載する狭衣物語の冒頭文は、このやうに多くは源氏物語、玉鬘の巻を直接の著述材料となし、それに作者の技倆を加へて書き出されたものと推定するのである。